

※はじめに

この作品は、幻冬舎リンクスロマンスより刊
行の「蝕みの月」番外編となっております。

本編のネタバレを一部含んでおりますので、
未読の方はご注意ください。

また、本作品は本編・番外編ともに実兄弟・
義兄弟の近親相姦がテーマとなっております。

この番外編に関しては、R18に相当する性描
写はございませんが、兄弟間の性行為を匂わせ
る記述がございます。万一、読後に不快感を覚
えられても、責任は御取りいたしかねますので、
あらかじめご承知下さいませ。

敬具

二〇一三年十二月二十八日 高原いちか



© 2013 ICHIKA-TAKAHARA

幸福論

高原いちか

満が、一気に表面化したからに違いない。

「三輪……」

ヨーロッパ中を飛び回って美術品や骨董品の買い付けをしている京の帰国は、特別に事情がなければ、通常半年に一度だ。一度機会を逃せば丸一年、二度逃すと

そして美しく細いうなじをさらしてうな垂れる義兄の背後に立ち、その瘦身を抱きしめる。

——それは、夏の暑さがようやく去り、秋風が吹き始めた頃のこと。

と一年半も会えないことになる。だが普通の兄弟ならば、たとえ共に家業を担う関係であっても、一年二年会えない程度でこうまで嘆くことはないだろう。

三輪もまた、しゅん、と涙を睨りながら、義弟の腕と胸に大人しく身を任せてきた。

「……えつ、帰れない？」

珍しく頓狂な声をあげた三輪に、背後のソファで新聞を読んでいた梓馬が、ん？ と目を上げる。

三輪の反応が異様なのは、彼と兄が、普通の関係ではないからだ。血を分けた兄弟でありながら、彼らは肉体でもって結ばれた恋人同士であり、淫靡で後ろ暗い禁忌

「……ごめん、みつともないとこ見せちゃったね」

「帰れないって、兄さん——どうして？ だって今年は夏のバカンスシーズンにも帰って来れなかったじゃないですか。クリスマスもまた駄目じゃ、もう一年以上……」

の悦びを分かち合う、共犯者でもあるのだ。

けなのに、梓馬に対しては保護者的にふるまわなくてはならないと思ひ込んでいて、盲目になった今もお、なかなか弱みを見せようとしなないのだ。

盲目の三輪は、扱いの面倒なスマートフォンではなく、

「そんな……」

——俺だってもう、泣き虫の小さい弟じゃないのに……。

家置き電話で話している。相手は、ヨーロッパにいる長兄の京だろう。穏やかな三輪にしては珍しく、詰るような口調なのは、この夏に帰省できないと告げられた時に「仕方がないですね……」と苦笑しつつ押し殺した不

やりとりが続くうちに、三輪の声がどんどん尖ってくる。その声がしゃくりあげる声になり、やがて力なく「はい……」と返答し、かちゃん、と受話器を置く音がした時、梓馬は新聞を置いてソファから立ち上がった。

男として、何とも歯がゆい思いを噛みしめつつ、梓馬は抱きしめる腕の力を強めた。

「たんだろ？」

「違うよ。ぼくがわがまま言ったから、ちよっと叱られただけ」

「そう言っただけに、叱られたって、と梓馬は口先を尖らせる。

「クリスマスはともかく、年末年始も帰国できないなんて、文句くらい言われて当然だろ。夏の帰省が駄目になった時だって、三輪、無理して我慢してたのにさ」

「憤る梓馬の心中は、やや複雑だ。この二歳年長の義次兄は、義長兄の愛人でありながら、梓馬の恋人でもある。

長男の京が実弟である三輪を愛し、三男で養子の梓馬もまた、三輪を愛した。実兄と義弟の双方から愛された三

輪が選んだのは、「どちらからも愛されたい」という結論だった。そして、三輪を心から愛していたふたりの男は、

それを受け入れた――。

だから京の不在によって三輪を独占できることが嬉しい一方で、三輪に泣かれるのがつらくもあるのだ。梓馬

は飴色の髪をさらさらと撫で、つむじにキスをして、恋

敵を恋しがる義兄を――恋人を慰めた。

「あいつめ――三輪を悲しませるようなことするなんて、ルール反則だろうが」

この許されない愛を貫くと決めた時に、三人はそれぞれに互いへの義務を負った。三輪は京と梓馬を平等に

愛し、どちらからの要求も一切拒んではならない義務を。そして京と梓馬は、視力を失った三輪を決して嘆かせないという義務を。

三輪が恋しがっていることを知りながら、二度も帰国することができなかった京は、それに充分背いている。

いつこのまま、もう帰国しても三輪を渡さないようにしてやろうか――とぶつぶつ呟く義弟を、三輪は宥めた。

「仕事なんだ、仕方がないよ。兄さんは汐月画廊を支えるために、外国でひとり頑張ってくれているんだから、

社長のぼくがそれに文句なんか言えないって」

「本当に仕事ならな」

「――ッ」

三輪の顔色が、さ……と蒼褪める。梓馬は慌てて、「あ、

ごめん」と取り繕ったが、三輪の唇はすでに紫色で、頬

も退色していた。その紙色になった頬を、梓馬は慌てて両手で包んで擦る。

「三輪、三輪っ」

しまった、と舌うちする。こんなにショックを受けるとは、さすがに想定外だった。

三輪は、精神状態が顔に出やすいタイプなのだ。しかも喜びや嬉しさは控え目にしか表さないくせに、不安や

絶望などのネガティブな感情は、まるで描いたように表れる。

――兄さんが帰国しないのは、本当に仕事の都合なのだろうか……？

――もしかして、あちらにいい人が出来たんじゃないか……？

ろくでもない想像が次々に浮かんでいるらしい顔を見て、梓馬は（あわわ）と焦り、どうしようと思案した挙

句、

「ン……！」

その冷たく褪せた唇に、熱を与えるように口づけた。

安直だが、この義兄にはこれが一番効果的なのだ。重ねて擦り合わせ、舌先で舐めて、慰めるようにくすぐるうちに、三輪は体の強張りをゆっくりと解いて行った。

唇を離し、改めて、包み込むように抱きしめる。

「……ごめん、不安にさせちゃったね」

「梓馬……」

「大丈夫だって。あいつはホラ、病気だから。三輪以外の人間はどーでもいいし、目にも入らないって、手の施しようのない病気なんだから、心变わりの心配なんかしなくたって大丈夫だよ！」

「……」

三輪が黙り込んだのは、変な慰め方だ、と思ったからに違いない。

だが梓馬が見るところ、京は紛うことなき「正気の狂人」だった。実弟の三輪が愛しくて愛しくてたまらず、

レイプした挙句に人里離れた別荘に隠すように住ませ、四年間も愛人として囲い、ついには尋常なセックスでは

満足できない体にしてしまったのだ。その上、三輪の暮

らしと研究生活を経済的に支えるために、闇商売にまで手を出していた。裁判で灰色無罪は勝ち取ったものの、現在もおそらく、かなり後ろ暗いことに手を出しているに違いない——と梓馬は思っている。三輪のためならば、

犯罪行為すらも厭わない。三輪を自分のものにしておく

ためならば、どんなに倒錯的な行為にでも走る。いかに

頭脳明晰であろうとも、あの男は立派な狂人なのだ——。

「でも、病気なら……」

だが梓馬の胸に抱かれている安心感からか、三輪は珍しく弱音を漏らした。

「——治ることだってあるかもしれないだろう？」

一年だ。丸一年も離れていれば、どんなに激しい執着も普通は冷める。頭が冷えて冷静になれば、京といえど

も、自分のしてきたことに怖れを成して、逃げ出したくなることだってあるかもしれない。

——実の弟との爛れた関係なんて、もう嫌になったんじゃないだろうか……。

キスによって一度は血色の戻った顔が、またも色褪せていく。

——ぼくが、あんまりにも淫乱だから、気持ち冷めてしまったんじゃないだろうか……。

——もし、もしそうだったら……ぼくも兄さんを愛してしまっただけで、今さら、そんなことになったら……！

「三輪っ」

梓馬はチアノーゼを起こしかねない三輪の頬を、軽くぺちぺちと叩いた。

「駄目だよ、それ以上考えちゃ駄目だ。負の思考のスパイラルにハマったら、底なしに悪い考えに引きずり込まれるよ！」

「……」

「あ、梓馬……」
見えない目を困惑するように泳がせる三輪に、梓馬は

ふう、とため息をつく。三輪の体がびくつと震えたのは、この義弟にまで呆れられたか、と思ったからだろう。

——今だ
梓馬は確信を持って、口を開く。

「ねえ、三輪——どっちにしろ、そろそろ考えてみる頃合いじゃない？」

「か、考えるって……？」

「あいつと切れて、俺だけにしなよ、ってこと」

「……ッ……」

三輪の表情が、今度は凍りつく。もっとも言われることが怖かった、もっとも考えたくなかったことを突きつけられたからだ。

「ねえ、あいつに浮気相手がいるかどうかは置いて、

この先ずるずるとこんな——あいつの気持ちが冷めたんじゃないか、新しい相手ができたんじゃないかって、滅多に会えないままずっと猜疑し続けるのは、三輪もつらいだろ？ この際、距離が出来たのを幸い、心機一転であいつと切れることも、考えていいんじゃない？」

「……あ、梓馬それは、でも……！」

「でも——どうしてもあいつと寝たい？」

「——！」

身も蓋もなく直截的に訊かれて、三輪は絶句する。

幾度か目撃させられたが、京と三輪の——長兄と次兄

のセックスは、互いの加虐嗜好と被虐嗜好を満たし合う、淫靡で爛れたものだ。このほっそりと美しい容姿を持つ

穏やかな三輪は、実はその体内に男に踏みじられ、苛められ、凌辱されたがる怪物を宿しているのだ。そして

その怪物は、京の内に潜む狂気と、相思相愛の関係だった。それは梓馬へのどこか母性的な愛とは、また別の——京でなければ決して満たせない、病んだ渴愛なのだ。

「……京と寝たいんだね？」

ひそ、と囁かれて、三輪は顔を紅潮させつつ、「ごめん……」と呟く。

——ごめん、梓馬……ぼくは多分一生、お前と同じく

らい兄さんを……あの人のことを……。

その心の声をしっかりと聞いた梓馬は、

「じゃあ、行けば？」

あつさりと告げた。

あまりに軽い口調に、三輪は咄嗟に、何を言われたの

かが理解できなかったようだ。「え……？」と飴色の目を

瞬いている。

「だって、あいつが——京が帰って来れないっていうんなら、三輪のほうからあいつのところへ行くしかないじゃん」

「……そ、それは……」

「ただし、俺はついていけないよ」

ぱつ、と手を離す。そして心細げに戸惑う三輪に、さらに告げた。

「だって年末年始はともかく、クリスマス前後なんて、

うちの作業じゃ書き込み時だもん。それ以外の時期でも俺と三輪が一緒に行くのは無理だし」

「……ッ」

三輪が言葉に詰まる。汐月画廊の現社長は三輪だが、事実上の切り盛りは、したたか者の末弟が専務取締役として行っているのだ。

——確かに、経営者が二人そろって銀座の店を留守に

することはできない。京に会いたいのならば、自分がひとりでヨーロッパへ行くしかない。だが、この目では……

…。

梓馬は三輪の顔を覗き込んで、(考えてる考えてる)と、

ひっそりほくそ笑んだ。

「ねえ、三輪」

にっこりとやさしく、語りかける。

「あいつを手放したくない。誰にも渡したくないって言

うんなら、選べる方法はひとつだけだよ」

わかるよねえ、と告げると、三輪は見えない目を瞞つ

た。

——それは、つまり……。

「ねえ、こうなったらもう、あいつと切れるか、自分か

ら追いかけるか、どっちかを選ばなきゃならない頃合い

なんだよ、三輪」

ちゅ、と瞼の上に口づける。それに、と笑いながら続

けて。

「もしうまくいったら、これって、あいつへのクリスマス

スプレゼントに最適じゃない？」

……年明け早々のロンドンは、厳寒の只中だった。

ディケンズの昔から、この街は有象無象の巢食う魔都

の一面を持っている。一国の首都であり、女王陛下のお

膝元であるにもかかわらず、地区によってはかなり治安

が悪い。その時々々の経済情勢しだいで、魔窟の勢力は周

辺地域にまで波及したり、逆に押し戻されたりする。

フラットの石段に座り込む毛糸帽子の男——いや、女

かもしれない——の姿を見た瞬間、京が考えたのは「食

い詰めたホームレスか？」だった。近くの教会で慈善配

給をやっているので、そこまでたどり着くエネルギーの

切れた男女が時々こうしてへたり込んでいるのを見るこ

とがあるが、個人宅の玄関前にこうもべったりと座り込

んでいるのは、もしかすると本格的な行き倒れかもしれ

ない。だとしたら面倒だな、と思いつつ近づくと、俯い

ていた人物が、突然顔を振り上げた。

今時珍しいくらい分厚い眼鏡を掛けた顔。東洋系なが

ら、抜けるように白い肌。秀麗な顔立ち。帽子から零れ
る髪の色は、甘い飴色——。

「み……三輪っ……？」

信じられない思いで、実弟の名を呟く。

「兄さん」

およそ一年ぶりに会う弟は、にっこり……と笑った。

「よ、よかった……。住所がここで合っているか、自信

がなくて……」

メモ代わりのスマートフォンを掲げて見せながら、は

はは、と照れ笑う。そこにはGPSによる目的地誘導ア

プリが表示されていた。

京は息を呑む。

「三輪……！ 三輪お前、見えるのか……？ 目が見え

るのかっ？」

三輪はこくり、と頷く。

「ええ、兄さん——二ヶ月前に、手術を受けて……本当

はクリスマスに合わせてこちらへ来る予定だったんです

が、リハビリに思いのほか時間がかかってしまって」

「三輪——」

兄の手が頬を包み、撫で回してくる感触に、三輪は恥じらって首を竦めた。ずくり——と、京の腹の底が疼く。

「それに失明から時間が経っていたせいか、視神経の働きがもう退化していて、期待していたほどには視力も回復しなくて」

結局、こんな眼鏡をかけて生活する羽目に——と三輪は照れ笑う。

「ひどいでしょう？ ただでさえ童顔なのに、これじゃまるで田舎の垢抜けない高校生みたい——」

だ、という語尾を、京は自分の口の中に吸い取った。

「ん……に、い、さ……」

抱き合い、唇を重ねるふたりの上に、雪花がまた、ちらほらと舞い始めていた。

と、「なに、着火剤だ」という答えが返ってくる。

火の近くで生まれ、と言われて腰かけた椅子から、三輪はまだ慣れない眼鏡のレンズごしに部屋を見回した。

重厚な、丁寧に住みこなされた雰囲気の家だが、家具や壁紙やカーペットのセンスは、どこか女性的だ。おそらく、兄のチョイスではないだろう。

——やっぱり……一緒に暮らしている女性がいるのかな……。

「インテリアは家主の趣味だ」

キッチンで電気ケトルをセットし終えた兄が、まだ何も聞かないうちから、三輪の不安げな視線にあっさりと

答える。

「こちらでは個人資産のフラットは家具付きで借りるのが普通だからな。いつもなら階下のフロアに家主の老婦人がひとりで住んでいるんだが、クリスマスの支度中に

腰を痛めてな。治るまでは娘夫婦の家で過ごすようで、しばらく留守なんだ」

京が火をつけた新聞紙の紙縊りを差し込むと、暖炉の薪はたちまち燃え始めた。「慣れていきますね」と感心する

——ああ、そういうことか……。

ほっ……と安堵した三輪の表情を見て、兄は可笑しそ

うに「安心したか？」と顔を覗き込んで来る。

「わたしが一年も帰らなかったせいで、浮気してるんじゃないかと心配になったんだろう？」

三輪はうつ……と顎を引き、頬を熱くした。この兄には、三輪がはるばるロンドンまで来た理由などお見通し

なのだ。というより、梓馬にもたびたび指摘される通り、三輪が顔に出過ぎるのだろう。

「ろ、老婦人の家に下宿なんて、シャーロック・ホームズみたいですね」

羞恥半分、あからさまに誤魔化しつつ告げると、

「ベーカー街221Bか」

京も珍しく声を上げて笑った。

「こちらでは子供が独立したり連れ合いが亡くなったたりして部屋が空くと、人に貸して賃料収入を稼ぐのが普通

だからな。収入の乏しい単身者は、割と平気で他人とフラットシェアをするし」

「生活の知恵ですね」

「そういうことだろうな。今も昔も、ロンドンに決して住環境のいい街ではないから——三輪」

「はい？」

いきなり口調を変えた兄は、ゆっくりと三輪の座る安楽椅子に近づくと、いきなりもぎ取るような手つきで眼鏡を奪い、その肘掛けに両手をつけて身を乗り出してきた。

「そういうわけで、この家は当面、我々だけのものだ」

あと数センチでキスになる距離で、兄は囁いた。

「は、はい」

「古い家だが、痩せても枯れても石造りだ。多少派手な声や物音をたてても、近隣には気づかれずに済む」

「……はい」

「覚悟はしているな？」

「——ッ」

「わたしの愛を疑った代償は、高いぞ」

やさしくなどしてやらない、と眼光鋭く宣告されて、ぞく……と体が痺れる。

京は、疑われたことを怒っているのだ。三輪に操立て

しつつ、異国で汐月画廊のために真面目に働いていたというのに、信頼してくれなかったことを怨んでいるのだ。

そして、その報復に、三輪をなぶるように抱くつもりなのだ。飛んで火に入る——とは、今の自分のことだろう。

どくん、どくん……と疼き始めた唇に、京が口づけてくる。

同時にシャツの裾から、冷たい手が滑り込んできた。

三輪は「う……」と塞がれた唇から喘ぎを漏らす。

「にい、き……」

「ひどくされたいか？」

「は……」

はい、と喘ぐように答える。

「そうされたくて——あなたに抱いて欲しい一心で」

まで来ました、兄さん……」

「いやらしい子だな、三輪——」

くすくすと愛しげな忍び笑いと共に、抱き寄せられる。そして耳元に唇を寄せられ、

「脱げ」

深い声で、だが容赦なく、兄は命じてくる。

「全部、自分で脱いでみせるんだ、三輪。そうしてわたしに、すべてを捧げる。言葉だけでは足りない。お前の愛と覚悟のほどを、この目で見て確かめたい」

「……ッ」

三輪は思わず唇を噛む。言葉だけでは信用してくれないなんて、ひどい。だけど、この兄の残酷さに、いつも自分は感心し、昂ぶって、心も体も投げ出してしまっただ——。

暖炉では、ぱちぱちと薪が爆せている。

三輪は安楽椅子から立ち上がり——震える指で、シャ

ツのボタンを外し始めた。

「——三輪？ ああ、今わたしの隣で寝ているぞ」

頬に涙の痕も生々しい全裸の弟の髪を撫でながら、京はスマートフォンを手にしている。

「あまりかわいらしく泣くものだから、簡単に気絶させてしまうのも惜しくてな、つい長々と苛めてしまった」

いつぞやの復讐の意味を込めて告げてやると、スマートフォンの方からは、『鬼畜め爆発しろー』という物騒な呪詛の声が返ってきた。義弟の梓馬だ。

「恨むな。お前はこの一年、三輪を独占できただろう。わたしはその間、ずっと禁欲していたんだぞ。そもそもこの作戦を考えたのはお前だろうが」

ふーっ、とベッドで煙草をふかしつつ反論すると、犬がうなるような声がぼそぼそと聞こえてくる。

『……まあ、なんとか三輪に、目の手術を受けさせられたってことで、今回はよしとするけどな……』

「あまり予後は良くないようなことを言っていたがな」

『うん、だってもう時間的にギリギリだったんだよ。去

年の定期検査で、これ以上盲目の状態が続けば、たとえ網膜を再生しても、長い休眠状態に慣れた視神経が働かない可能性が高い、って宣告されてさ』

どんなに弱視でも、視力が戻っただけ儲けものだったんだ、と梓馬は言う。

「そうか——」

『三輪はもうずっと、見えないままでいいって言ってたけど、俺にしてもあんたにしても、三輪を最後まで守ってやれる保証はないだろ？ 汐月画廊の経営だって、ま

あ頑張っちゃいるけど、このご時世にいつまで続けられるかわかんないし。最悪、経済的な基盤も俺らの助けもなくなった三輪が、老後に盲目のままひとりで残されることだってありえるし？』

もしそうだったら、まったく見えないよりは少しでも見えるほうがなんぼかマシだろうしね、と、義弟は軽い口調で深刻な事を言う。

考えたくもない可能性だが、全くその通りだ、と京は

思った。三輪に妻や子や孫を持たせない人生を強いたの

は自分たちなのだから、三輪がひとり残された場合のことを考えておいてやるのは、義務というものだろう——と提案してきたのも、この義弟なのだ。

「……しかしお前も大概自虐的だな。手術を受けさせるためとはいえ、三輪のわたしに逢いたい気持ち煽るなんて——お人よしか？ 馬鹿なのか？ それとも、何が

あつても三輪に捨てられない自信があるのか？」
ほとほと呆れた、という声で嘲ってやると、
『すべては三輪のためさ』

平然と——少なくともそう聞こえる声で、梓馬は言った。兄弟としてはそれほど年が離れている義弟ではないのだが、自分とはずいぶん世代が違う、と感じるのは、

こんな時だ。自分は三輪に対して、何が何でも他の男の手など渡してたまるか、という執着心が強いが、この義弟は、三輪の心が他に向いてしまったら、その時はその時で仕方がない、という思考らしい。

すべては三輪のため。三輪の意思が何より大切。三輪

が幸せになるためならば、自分の恋情や嫉妬心すらも押し殺す……。それはそれで、背筋が寒くなるような狂気の愛だ。

「――梓馬」

『何だよ』

「いや……」

お前は大了した男だ、と言いかけて、京は苦笑半分にそれを呑み込んだ。永遠の恋敵、最愛の三輪の心を、半分奪って行った男――本来ならばなぶり殺しても飽き足りないほど憎い相手だろうに、不思議に今、自分は、この義弟に友情のようなものを感じ始めているようだ。

あるいは、共犯者への信頼、のようなものを――。

『用事がないなら、もう切るぞ』

「ああ、わたしももう眠る」

三輪を抱いてな、と告げてやると、再び『爆発しろおー!』という悪罵が返って来る。

『いいか、日本に帰すまでに、あんまり泣かせるなよ!』

という念押しを最後に、ふつんと通信が途切れる。

「……絶対泣かせるな、とは言わないんだな」

諦めているのか、それとも、義長兄と義次兄の関係に、悟りを開いているのか。

にやりと笑った京は、スマートフォンをベッドサイドに置き、裸の肩に寝具をかぶりながら、片腕に三輪の体を抱き直す。

「……ん……」

すんなりとしなやかな体が伸びる感触に、情欲とともに、また愛しさが募った。

「愛してる……三輪……」

ちゅ、とキスをして、「おまけだが、梓馬の分もな」ともう一度音を立てて。

奇妙な形の幸せを、京は深く噛みしめながら、両目を閉じた。

〈終〉